

仲宗根政善君の『繩今帰仁方言辞典——今帰仁
沖

方言の研究・語彙篇——』に対する授賞審査要旨

沖繩本島の方言は、中南部方言（代表は首里方言）と北部方言（別名、国頭方言）に二大別される。後者は、かつての琉球王国が中山・南山・北山と鼎立した時代に、北山と深い関係にあったと推定される地域の方言であって、中部の首里を中心とする方言では、語頭の「ハ行子音」が、東京・京都方言と同様、hに変化している（例えば、hana花、鼻）のに対し、今なおpとして保持している（例えば、pana花、鼻）など、日本語史研究上重要な方言である。首里方言については『沖繩語辞典』（昭和三十八年）があるが、沖繩北部方言についての同様な大辞典が待望されること久しかった。

仲宗根政善君は、明治四十年に、北山城址に真近い国頭郡今帰仁村字与那嶺なまがねに生まれ、首里中学校、福岡高等学校を経て、昭和七年に東京帝国大学文学部国文学科を卒業し、帰郷後、郷里の県立第三中学校（現在の名護市にあった）で教鞭を取るかたわら、自己の方言の研究を始めた。

昭和二十年に沖繩島が戦場と化した時には、県立女子師範学校の女生徒を引率して島の南部を転戦し、最南端で負傷して倒れ、九死に一生を得たが、研究資料はすべて失った。

戦後、琉球大学教授となり、図書館長、副学長を兼ねながらも、良く後進を指導し、琉球諸方言研究の今日の盛況

の基礎を築いた。一方、自らも琉球諸方言とその歴史の研究を進めるとともに、自己（および父君）の与那嶺方言の大辞典を完成したが、本書である。

本書（昭和五十八年刊）は、「本文篇」（六三九頁）、「解説」（五九頁）、「索引」（一八五頁）、「付録」（一三頁）より成る。

「本文篇」は、一万五千を越す見出し項目を、仮名表記・音韻記号表記（共にアクセント表記を含む）を並記して示し、仮名表記の五十音順に従って排列し、各々の品詞分類名を記し、動詞には活用型を示し、標準語を用いて意味が記述してある。特に基礎的単語等には用例が豊富に挙げてあり、必要に応じて「幼児語」「古語」「文語」「新語」「稀な語」など文体的意義特徴を示し、しばしば関連の民俗にも言及している。そして、『古事記』『日本書紀』『万葉集』等の古典や、沖縄側では『おもろさうし』『混効験集』『琉球国由来記』などをも参照し、現代方言では九州諸方言を中心に日本全国各地の方言の対応形を挙げている。『沖縄語辞典』『奄美方言分類辞典』の対応項目には特に注意して語彙を選び、『日本方言地図』に該当の語が掲載されている場合にはその巻数と図番号を示し、『図説琉球語辞典』の番号項目をも示している。

本書のような共時論的記述辞典には、その資料の純粋性が厳しく要請されるが、著者は今帰仁村内の一つの字である与那嶺の方言に限定することにより、その要請に応えている。

「解説」は、(一)音韻、(二)動詞、(三)形容詞、(四)アクセントの型と語例、に分かれていて、それぞれについて詳説している上に、付表として、「動詞活用表」「動詞型助動詞活用表」「形容詞活用表」「形容詞型助動詞活用表」「動詞基本

型アクセント表」の五つの極めて美しい表が添えてある。

「索引」によって、標準語形から方言形が見出せるようになってゐる。そしてその付録では、感動詞、擬態語・擬音語、それから作られる動詞、接頭辞・接尾辞とそれに類する語、助詞・助動詞・その他、が一覧できるようになつてゐる。

巻末の「付録」には、地名一覧（沖縄島を中心とする琉球の地名を与那嶺式に読んだ発音の表記が五十音順に排列してある）、屋号一覧（童名、役職・位階名、職業、地名、姓、名、普通名詞、綽名、その他による屋号の一覧表）、与那嶺の屋号地図とその索引、が含まれてゐる。

これを要するに、本書は、今帰仁村字与那嶺方言という一小方言の共時論的記述辞典ではあるが、この種の辞典としては、今日までに刊行されたものうちで、最も精緻にしてかつ組織的なものであると言つても過言ではない。

しかも本書は、琉球諸方言の比較研究のみならず、さらに本土諸方言（八丈島方言を含む）との比較研究、ひいては広義の日本語史研究のための、重要にしてかつ信頼のできる基礎を築いたものであつて、将来、これを模範とする、少なくとも琉球諸方言の大辞典が、編纂刊行されることが期待される。

なお、同君は同じ方言の大きい文典の執筆に着手してゐる。